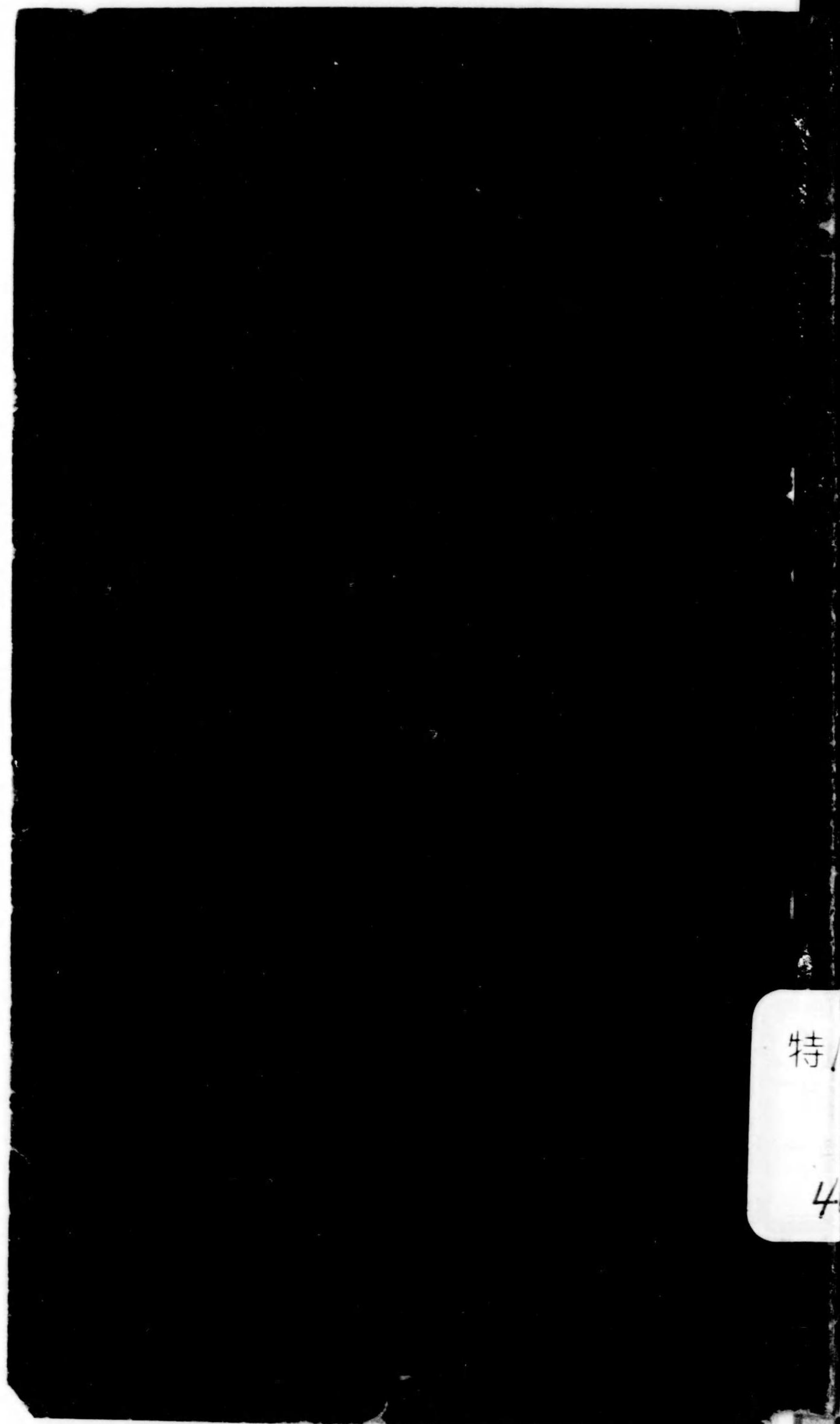


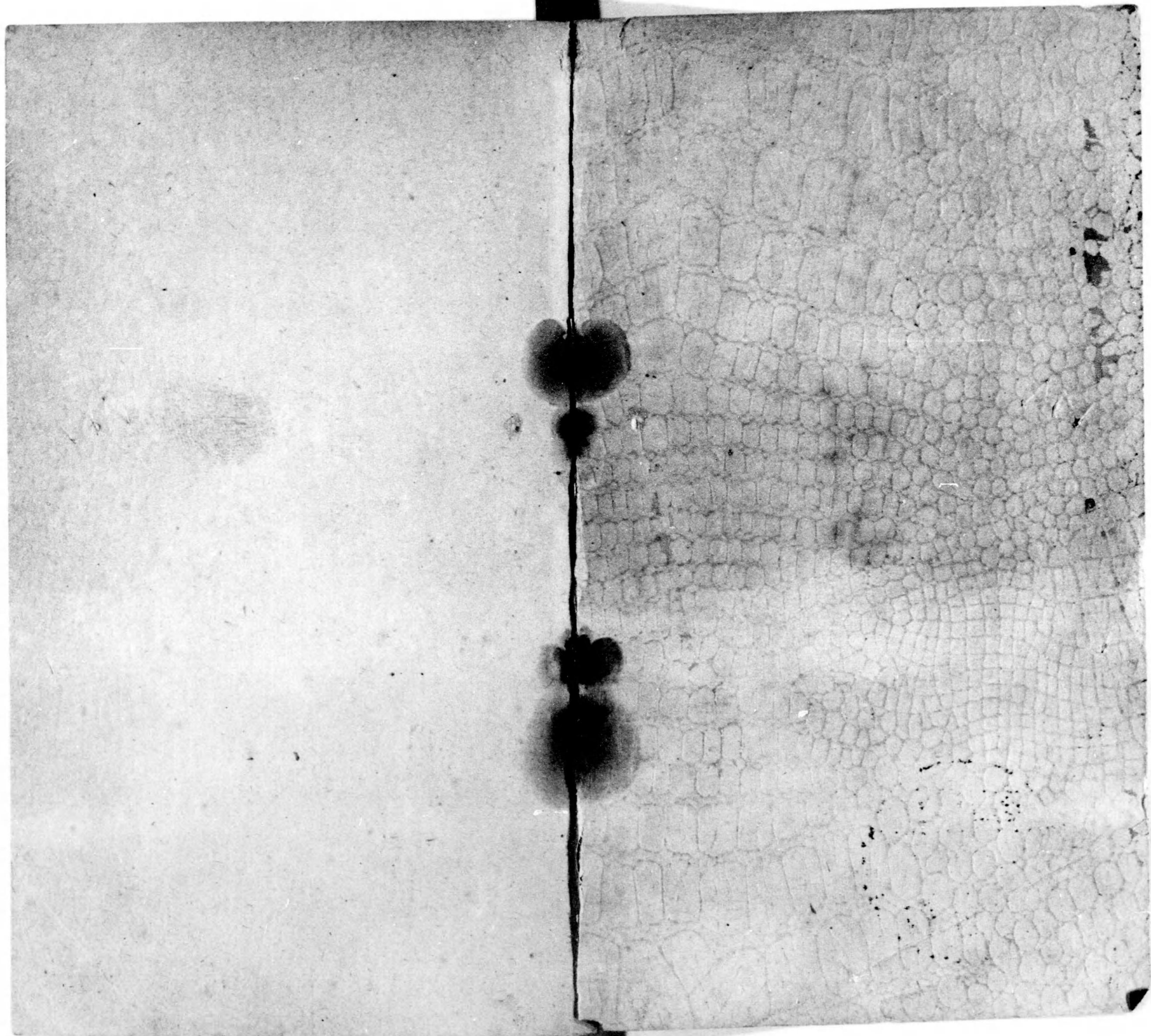
始



特

4





特10
466

字題

高貴の御眞蹟
東郷元帥御筆
大迫大將御筆
上村大將御筆

護國の本尊縮寫
加藤清正公軍令狀
居士鐵腸口演
散史如空速記

人は武士全

大阪 何ぞを社發行

此冊子には高貴の御方及び元帥大將方の御
筆跡并に日蓮聖人の御本尊加藤清正公の軍
令狀等あれば疎略の取扱なき様に頼みます

高貴の御眞書

修如一誅意

此御五字は畏くも 今上天皇陛下が尙ほ皇
太子殿下にて渡らせ給ふ御時に書て土方伯
に賜りし御物、何事も皆な終始一誠意が肝
要、殊に國家の干城たる軍人は尙更の事、
依て恐れを凌ぎ爰に寫真版として奉掲し、
以て 今上天皇陛下が御幼少の御時よりの
終始一誠意を此書の讀者諸君に似らしめん
との微意を其儘にと、恐惶謹言

至誠

東洋書局

東郷元帥は至誠の權化だとの世の定評は今更云ふ迄もなし、而して其人の御筆跡たる至誠の二字、若し之を上頁の終始一誠意に對して論ずれば何うなるか、更に又た此二つを妙法蓮華經の五字に對して日蓮聖人の傳記を解讀したら何うなるか、それは讀者に讓つて爰には世の人が之を鏡として己が行動を映さんとを懲憑するのみ

根 深
枝 繁

為教書

此書は大迫陸軍大將の御筆跡、陸軍大將に
大迫氏二人あり、御兄弟にて兄君は尙敏と
稱し皇族方及び華族の子弟を教養せん爲に
勅命にて設けられたる學習院長、即ち乃木
大將亡き後の榮職なり、弟君は尙道と稱し
軍事參議官なり、共に薩州出身にて日蓮聖
人に何等の縁故はなかりしも、聖人の國家
觀に感じて尊崇の念を起されしなり

源流
長遠

此書乃木尙道尙敏兄弟御筆跡也

この本尊は日蓮聖人が元寇反撃を天に祈らせ
 給ひたるもの、故に之を護國の本尊と稱し
 今ま尙ほ尊崇あつし、來歴は武田信玄、織
 田信長、豊臣秀吉、加藤清正、藤堂高虎を
 經由せしにありて、藤堂家の祈願所たる山
 城加茂の燈明寺の三重塔より由緒書類と共
 に發見せられたるもの（諸天晝夜常爲法
 故而衛護大日本國）の文字に注意あるべし

元寇軍の日本國、
 祈願所たる山、
 山城加茂の燈明寺、
 三重塔より由緒書類と共
 に發見せられたるもの、
 諸天晝夜常爲法
 故而衛護大日本國、
 武田信玄、織田信長、
 豊臣秀吉、加藤清正、
 藤堂高虎を經由せしに
 ありて、藤堂家の祈願所
 たる山城加茂の燈明寺の
 三重塔より由緒書類と共
 に發見せられたるもの、
 諸天晝夜常爲法故而衛
 護大日本國の文字に注意
 あるべし

慶長十三年
 清田

元龜天正年間の英雄豪傑中に加藤清正、藤堂高虎等の日蓮聖人讃仰者のありしと、明治大正の今代に伊東祐亨東郷平八郎上村彦之丞大迫尚敏等の諸將に是が多くありしとは、何だか其間に特殊の交渉があつたらしく思はれる、併し其事は研究に譲つて爰に掲げし軍令狀、是は清正公が卒去の五年前に木村又藏に遺はされしもの也

人は武士序

今年は如何なる年の巡り合せか、我社の社友及び社員全体の交際社會に、徴兵検査に合格して來る十二月一日入營する者が、例年よりも多くて惣べて二十八人

二十八人の數は多くはないけれども、狭い交際社會に對して算すれば非常に多い方なり、そこで餘り早すぎたけれども、此人數の多いのを悦んで去る九月二十八日、一同を集めて送別會を開く事とし、此

旨を二十八人に告た所が不思議にも一人も残らず集まつた、それで予は彼等の爲に精神修養と奮勵努力を兼た駄辨を暫時振つた、如空子傍らに在つて速記して居たが、到々斯んな冊子になつたから、そこで元帥や大將方に願つて題字を書いて頂いて爰に出版發行した、何かの要を爲すならば役に立て下さい、之を序とす

大正の御大典の月

鐵 腸 識

人は武士

居士 鐵腸 講演
散史 如空 筆記

ア、諸君

諸君は本年が徴兵適齡で、而も合格して頓て入營せられると、家事上の關係、一身上の成行から云はゞ、種々の都合もありませうが、一般國民と云ふ公の上から云はゞ、先づ以て大慶と祝するの外はありませぬ

是が若し躰格が虚弱で不合格で劾られたとか、舊幕時代の様に兵士に成る権利がないとか云ふのならば、私と云ふ上に於て當分の都合は好からうが、公と云ふ點に就ては行末の都合が甚だ好くありませぬ、何故かと云ふに、虚弱な身体では長生が出来ませぬ、兵士に成る権利のない者は昔の奴隷であります、按しなさい我國の國體を、建國の始めからして

國民皆兵

と云ふのがそれです、嗚呼國民皆兵、所謂建國の始めは天皇は大元帥で大臣大連が之を輔け奉り、國民は皆な鋤鋤を投げ棄て劔戟を手にし、勇んで軍に従つたものであります、例を挙げますれば、人

皇の初代神武天皇の建國が是に始まつて、全十二代景行天皇の熊襲親征がそれ、二度目の熊襲の反と東夷の亂とに日本武尊が出征し給へたのが、稍々異なるが様であれども、詰る所は皇太子が天皇に代らせ給へた迄の事で、親征と申上げ奉る點に於て何等の妨げる所はありませぬ

次に人皇十四代仲哀天皇の御宇に、神功皇后の三韓征伐がありましたが、是は仲哀天皇は又も熊襲征伐で筑紫に幸し給へて、進んで三韓へも親征がある筈であつたのに、不幸御惱に罹らせ給へたので、それでの御名代であるから、是も亦た親征と申上げ奉りて何等の妨げはありませぬ

追々と代が下り

四

て源頼義、全義家が奥州征伐する様になつてからは、御名は親征でも其實は將軍の征伐で、是より家從郎黨なる者が出來て、天皇に隸屬すべき軍兵が勃々と將軍に付隨する様になりました

源平二氏が互に權威を争ふ様になつたのは、詰る所は是から起つた弊で要するに私闘に過ぎませぬ、彼等は私闘と云はれたくないと云ふ所から各々天皇、又は上皇を挟んで詔勅とか院宣とか、名を皇室に假りて居るけれども、全くの所は私闘です

私闘の結果は源頼朝が御委任と云ふ御名の下に兵馬の大權を私仕だした、是より朝廷は空位を守らせ給ふ事になつたが、それで

も此時まだ國民は一般に兵士になる權利はありました

更に下つて足利、織田、豊臣、共に國民が兵士に成る權利は奪はなかつたが、徳川となつては全く之を奪つて了いました、士の常職と云ふ者が規則的に出來て、我々平民は何うしても侍に成る事が出來なく成て了いました、一方から云ふと鋤鋤又は算盤と組打して居さいすれば、それで人生の定命を全うし得られるのだから、或は都合が好かつたかは知れませぬが、斯うなると人間も全くの鐵槌の川流れで一生頭の上る例しなしであります

維新の變革

は此亂暴な政体が破れて、所謂國民皆兵と云ふ制度に復したのだ

五

から、換言すれば國民一般が此時より侍に成る權利を復して來たのであると斯うなります

斯う云ふと諸君は兵卒と云ふのだから、侍と云つた所で餘り難有くないと思はれるか知らぬが、結り士官と兵卒と、軍紀の表に上下の別はあつても、侍と云ふ一字の意義に於ては毫も異なつた所はありませぬ、其證據は、職に殫れた時には士官も兵卒も共に靖國神社に合祠せられて、全時に一の神靈となつて恐れ多くも天皇の拜を受けて居るのがそれでありませぬ

又た士官は始めより戰術を習ひ戰理を學んで成人であるから、軍紀の表では階級が上にある、それだけに其階級に隨つて敬意を拂

つて行くのであるが、それも元を洗つて見れば我々と同じ平民が幾干もあります、左れば我々でも幼年の時から戰術を習ひ戰理を學びさへすれば士官にもなられます、此點に於て明かに鋤鋤黨や算盤屋が高級の侍に成る事が得られる様になつたのが知れませう

ア、平民が侍になられる様になつて來た、それで級から云は下級には相違ないが諸君の入營後は、イヤ規定の現役を終つて解隊せられても、或る年限中は諸君は侍です、侍であるだけに諸君は又軍紀を守り軍律に従ふは勿論の事、戰に臨んでは命を鐵砲玉の的にせねばならぬ、左れば今後の諸君は

此精神が肝要

であります、近時の西洋の戦争の様には、一戦争毎にそれが終ると公報の尻に捕虜が何千人何萬人、捕虜となつたら氣樂なものでもありませう、食物が足らうが足るまいが、又た高からうが安からうが、節期が来ても掛取の鬼は襲はぬ食物は腹一杯食せて呉れる、衣服も亦た寒くない様に着させて呉れる、それで仕事なしで遊ばせて呉れる、氣樂なものでありませう、無論戦争はせぬのだから命に別條はありませんありませぬ

然れども是では侍は兎に角に寧ろ人間の中ではありませぬ、西洋では戦争が終つた後に國民が此捕虜に對し、何う云ふ待遇するか知りませぬが、我國では先づ國籍があるから據なく戦後受取位のもの

で、其後は社會が爪弾きして彼の破簾耻罪の前科者以下に待ませう、三十七八年役の時の小數の捕虜になつた人に對しての我が國民の待遇、諸君も能く御承知であります、左れば諸君の今後は一朝事のあつた時には、瓦となつて命を全ふするよりも、寧ろ玉となつて骨を鐵砲玉で碎くに如かずとの大覺悟が肝要です

此大覺悟は平時に決て置ねばなりません、然れども亦た一方から云ふと命は人生絶對の大切物であります、そこで今此大覺悟を平時に決ると同時に一方では玉となつて命を全ふする方法も講じて置ねばならぬ、その爲に爰に諸君に

日蓮聖人を紹介

して此二大方法が容易に諸君の胸中に容まる様にして上ませう、
抑も日蓮聖人と云ふ御方は始めから自分の命にノシを貼て敵の前に
投げ出して置せ給ひた人でありませう、追々と細説はしますが先づ第
一に諸君に御聞せ申すのは御遺文中にある筒御器抄の御文の、北條
義時は天下の謀叛人であるといふ御文であります、諸君、頭腦を冷
静にして按し給へ、日蓮聖人の活動は建長五年に始まつて弘安五年
に終つて居ます、其間三十年、時は鎌倉の盛時で始めは北條時頼、
次は北條時宗、共に謀叛人であると怒鳴せ給ひた北條義時の爲には
子孫で、時頼は祖孫、時宗は曾祖孫です、其祖孫曾祖孫に對して汝
の祖父は天下の謀叛人であると怒鳴る、戦場で捕虜になる様な人で

十

は出来ない、對手は天下の執權、無禮の一言で頸は胴を離れて了ふ
、夫は兎に角に此北條家の系譜を見るに、其祖先は平貞盛で二代
が全維時、維時より伊豆國北條へ移つたので北條を姓としました、
時政は第四代で源頼朝に仕へて更に鎌倉へ移りました、謀叛人の
義時は時政の二男で兄宗時が源頼朝の石橋山の旗上の軍に従つて
討死したので、それで二男の義時が時政の後を繼いだのであります

北條時政は却々に奸智に長じた

曲者で、平氏でありながら源氏に仕へて家を興しました、さうす
ると其子の義時は又た親の時政以上の曲者で、姉の政子即ち世に尼
將軍の名ある源頼朝の後家の二位局と結托し、闇々の中に遂に源

氏ヒの後あとを頼朝よりともより三代目だいめ、即ち源實朝みなもとさねともで亡ほろぼして丁しいしました、是これからが己おのれの世よで鎌倉かまくらの執權しやくけんたる名稱めいせうを以て朝廷てうていも將軍家せうぐんけも、全まく己おのが暴威ほういの内うちに攝おさめて勝手かつてにしました、今いま大日本史だいにほんしの文ぶんを其儘そのまに讀よんで此この北條義時ほうてうよしときの人ひとと爲なりを御聞おききに達たつさせよう

七月ななつせうまつ(承久てうてい)九條帝くじやうていを廢はいして後堀川帝ごほりかはていを立て、上皇せうわう(後鳥羽天皇ごはてんのう)を隱岐おきに、土御門上皇つちみかみかみせうわうを土佐とさに、順德上皇じゆんてくせうわうを佐渡さどに遷うつし、并ならに雅成まさなり頼仁よりひと二皇子わうじを流ながす、義時よしときは外ぐわいに忠孝ちゆうかうを示しめし内ないに陰狡いんかうを極きはむ、頼家よりとも(頼朝よりともの子こ)及び其三子およそのしを弑しほし、又またた宗室阿野全成等さうしつあのまとなりらうを殺ころし、實朝さねとも(鎌倉かまくらの三代目將軍職だいめせうぐんしやく)の弑しほる又またた義時よしときの意いに出いづ、而しかして蹤跡じゆうせき詭ひ秘ひ、人ひとその端倪たんげいを窺うかふと能あたはず、承久せうきうの犯闕はんけつ以後いごに及び、天子てんしを

廢立はいりつし大臣だいじんを進退しんたいし、世々よよ其家そのいへに出いつ攝政せつせい以下いかも愬うつふる有あるに至いたりて其曲直そのまよくちよくを質たす、國家こくかの大柄たいへいは悉ことごとく鎌倉かまくらに歸きす云々うんぐんぐん
何なうです是これで解わかりましたか、日蓮聖人にちれんせうにんが

北條義時は天下の謀叛人

であるど怒鳴どならせ給たまひた其北條義時そのほうてうよしときの人ひとと爲なりが、併しかし大日本史だいにほんしは只ただ讀上よみあげた迄までであるから多少解たせうわかり難にくい邊へんもありませう、そこで更さらに註釋ちゆうしやく的に説明せつめいませう、即すなはち今いま讀上よみあげた文ぶんの中うちに

承久の犯闕以後に及び

の文ぶんがありました、その承久せうきうの犯闕はんけつとは具つさに承久三年せうきうねんの大亂たいらんの以後いごと云いふ事ことで、北條義時ほうてうよしときが三上皇せうわうを流ながし奉たてまつつた其後そのちとなりませう、

そこで又た更に承久三年の大亂の事蹟を述んに

始め源頼朝が鎌倉に覇府を設けて以來は朝廷の大權が鎌倉に移つて、皇室は全く空位を守らせ給ふの實質となりました、それで後鳥羽帝に至つて源頼朝の後を自滅させて、大權を朝廷に攝めんと苦心し給ひました、時に偶々北條義時の密謀で鶴ヶ岡の別當公曉と云ふ者が、己れ源頼朝の血統である處から他に煽動られて三代實朝の社參に際し、旨く其實朝を弑して己れ代らんとせしを、北條義時の爲に將軍弑逆の罪に問はれ、殺されて了つたので是で源頼朝の後は絶ました、是が承久元年正月の事であります

其後は北條一門の世で、僅に二歳になる頼經を京都より將軍職に

迎へたけれども、天下は全く北條一門の天下です、年鑑にも承久二年から嘉祿元年まで六年の間は政子即ち源頼朝の後家の二位局の世、又た其弟の北條義時が同時に鎌倉の執權となつて居ます、鎌倉の將軍家に執權職を置たのは是が始りです

此時は順徳帝の御宇で後鳥羽、土御門の二帝は已に御位を退ひて上皇となつて居させ給へます、時に鎌倉に斯の如き變があつたので、上皇の御意は改めて北條一門の上に注がせ給ふ御事となり、又た御深慮も改まつて今は正面より鎌倉を征討せん御事となり、順徳帝にも勸めて御位を仲恭帝に譲らしめ給はせて、三上皇が鼎座して専ら其謀議を凝させ給ひた、是が承久二年の御事です

承久三年(大亂の事)

に至つて此事が鎌倉へ知れて、北條義時は尼將軍の政子と謀つて朝廷を犯し奉る事に決しました、朝廷も亦た斯うなつては後へ引く譯に參らぬのみか、兼ての謀議が爰にあつたのだから遂に其五月十五日に鎌倉征討の御發令があり、又た是と同時に官軍を東に向はせ給へました、此時また北條義時も長男泰時、二男朝時を大將として、兄は東海道、弟は北陸道、外に武田信光の一軍は東山道と、此大軍を三道より京都を指して發途せしめました

北條泰時の第一軍が尾張國へ着した時には官軍は木曾川に進んで陣して居ました、そこで此兩軍が六月八日に木曾川で會戦したが、

此時木曾川の水は上へ流れたのか、官軍は只だ一戦に敗北して京都へ遁れ歸りました、其後は三道の大軍が進んで來たので、官軍が要害として守つて居た湖水の一流、即ち瀬田、宇治、淀の各所が悉く破れて、六月十四日に鎌倉の大軍は京都へ雪崩を打て入り込みました、全く疾風の如き勢です

此時三上皇は已に比叡山へ遁れて居させ給へたけれども、遂に泰時の爲に虜にせられて、義時の意に依りて大日本史にあるが如く、隱岐と土佐と佐渡との三島へ流され給へました、是が承久の大亂の略細説であります

諸君之を聞て何う思ひますか、現代の世に若し北條義時の様な者

があつたら諸君は何を以て其者を待ちますか、今ま云ふ所の普天の下卒土の濱皆な王土にあらざるは無しとは、我が建國の國體でありますぞ、左れば我が國體は現界に斯の如き事のあるのに、冥界の靈が之を黙して居る筈はない、宜なる哉冥界の靈は現界に空前の大偉人を生みました

日蓮聖人と云ふ御方

が即ち其大偉人でありませう、其事實は前に述べた北條義時の祖孫と曾祖孫に向つて、北條義時は天下の謀叛人であるぞと怒鳴らせ給ひた事の外に、尙ほ追々と説明するとして、今は先づ其御誕生の御時より始めませう、抑も日蓮聖人の御誕生は貞應元年二月十六日である

が、此二月より十ヶ月前へ繰り返して母胎に托し給へた月を思ふと、全く承久三年五月であります、即ち北條義時が三皇を流し奉つた其月であります、嗚呼彼と是と同じ月

日蓮聖人の托胎の月が不思議に北條義時が三上皇と二皇子とを流し奉つた月です、左れば已に是のみで何とか曰く因縁を付れば付られぬ事はないのに、其上に聖人は修學を卒へて活動を始めんとして何よりも前に先づ

伊勢の大廟へ詣で、

而も一七日間の御起誓、其後は殆んど専ら北條一門に邪心を翻して正道に就ん事の諫言、此諫言が僅に十五ヶ年間に三たびに及び

ました、時に北條一門は何うしても之を用へぬ所から、遂に怒鳴て曰く北條義時は天下の謀叛人であると、更に其面前にて怒鳴て曰く日本國を亡ぼす者は北條殿であると、又た更に怒鳴つて曰く日本國の武士の中に源平二家と申して王の門を守る犬二匹候と、いかにも命が捨てたかつた様子です

此内の日本國を亡ぼす者は北條殿であるとの怒鳴は全く蒙古襲來に就ての怒鳴で、是が又た聖人の龍の口の御難の原因です

諸君しづかに按し給へ、我國は古來未だ外國より侮辱を受けた事のない國だと誰でも云ふ事です、成程侮辱た奴にそれ以上の報復しさいすれば、全く侮辱を受けた中ではないが、それでも侮辱を受けた

事實は没却し得られぬ、所以に大日本史や外史や、又た近來政府で編纂せられた伏敵篇やには載て居る、その

蒙古襲來の事蹟

です、時は建長五年正月ですが彼れ蒙古は國信使をして我國へ牒狀を渡しました 其文は

大蒙古國皇帝書を日本國王に奉ず朕 惟に古より小國の君境土相接する者は信を媾じ睦を修むるを務む況んや我祖宋天の明命を受け逼夏を奄有す遐方異域威に畏れ德に懐く者數ふ可からず朕即位の初め高麗無辜の民久しく鉞鏑に瘁むを憫み即ち令して兵を罷めしめ其疆域を還し其旄倪を反へす高麗感載して來朝す義は君臣

と雖も歡び猶ほ父母の如し計るに貴國も亦た既に之を知らん高麗は即ち朕の東藩なり貴國之に密邇し開國以來時々中國に通ず朕の躬に至りて曾て一乗の使を以て和好を通ずる無し恐らくは貴國之を知るの未だ審かならざるを故に特使を遣り書を持ち朕の志を告ぐ冀くは自今以往問を通じ好を結び以て相親睦せん且つ聖人四海を以て家となす好みの相通せざる豈に一家の理ならんや兵を用ふるに至りては其れ孰れか好む所ぞ王それ之を圖れと云ふので、固に無禮を極めた文意であります、然れども此蒙古と云ふのは當時の我國の國勢から云ふと實に百倍の大敵です、所以に上は龜山天皇はじめ奉り下は國民一般に色を換へて驚きました、其

蒙古は西曆千百九十年代、我が高倉天皇の御宇、支那は宋の孝仁、金の世宗、夏の仁宗の三分鼎立の時であります、此時韃靼蒙古は群雄割據の有様でありましたが、成吉思汗鐵木眞の起るに及びて四方の群雄を征服し、蓋世の智勇を以て四隣の諸國を併呑し、遂に蒙古新帝國を建設しました、是より世界征服の志を起し、大軍を卒ひて中央亞細亞の野に出で、天山を越え土耳其斯坦を略し、中央亞細亞第一の關門たる鐵門關を破つて基華を征め、更に轉じて土耳其を破り、歐洲の東南部、露西亞匈牙利等の諸國と戦ひ、波斯を征して南方東印度に入りて全く之を服し、歸つて金宋を平定するの計を講じて居ました

是は蒙古の初祖で後に我國へ手を出さんとした忽必烈の祖父であります、時に其忽必烈です、是が又た祖父鐵木眞に超えた豪傑で、鐵木眞が征服した領土を保全せしのみか、遂に鐵木眞が餘した所の支那全土を悉く併呑しました、我國へは前に讀み上げた牒狀の後、文永十一年と弘安四年との二回まで襲ひ來りましたが、前の文永の時は彼れは頻りに支那即ち金宋と戦つて居ました、後の弘安四年の時は全く支那を征服し盡して居ました、是位であるから始めて牒狀の來た文永五年の

我國の驚きと云つたら

實に言外でありました、今ま其次第と有様とを述べれば、文永五年

正月、蒙古は其臣藩阜をして牒狀を筑前の太宰府へ手渡しさせました、太宰府は之を鎌倉へ送り、鎌倉は之を京都へ送りました、時に龜山天皇の御宇、天皇は大に宸襟を惱まし給へて、復牒を菅原長成に命じて書せしめ、以て之を鎌倉へ御遣しになり、一方には天皇が御手づから草させ給ひた宸筆の宣命を、右近衛大將藤原通雅を勅使として伊勢大廟に奉り、更に山陵使を發して楯列池上功山階智大内山多圓宗寺條法住寺川大原羽金原門の七陵に告げさせ給へ、傍ら又た神社佛閣へ命じて國禱會を修せしめ給ひし等、なか／＼容易ならぬ有様でありました

時に又た鎌倉では蒙古の牒狀の書辭が無禮だと云つて、京都より

の復牒は押へて之を蒙古に興へませぬ、そこで蒙古は其後たびく
 の催促でした、其中文永六年には彼れは我が對馬人二人を虜にして
 歸りました、全八年には彼れの參謀總長とでも云ひつべき役向の趙
 良弼なる者が來り、全くの居催促と云つたが様な勢で、太宰府から
 京都と鎌倉とへ使者を立てさせて、己れは筑前博多近傍の今津と云ふ
 所に滞在し、月の明りに乗じて其界限の地理を測量しました、是が
 發見して兎に角に逐ひ還されましたけれども、此趙良弼の渡來で已
 に彼れが爲には我國へ襲ひ來るの手筈が殆んど調つて居ました、然
 れども彼れは大事を踏んだのか、更に全九年には高麗王植をして復
 牒を迫らせ、全十年には忽必烈が其臣をして之を薄らせました、そ

の後は文永十一年の蒙古襲來であります

日蓮聖人は是より先き

即ち牒狀の到來した文永五年より九ヶ年前の文應元年に、立正安
 國論と題したる一卷の書を著はし、之を前執權北條時頼に進達して
 頓て此事あるを豫言し、以て大に時頼を諫め給へました、前に申し
 た三たびの諫言の第一であります

北條時頼は此諫めを容れませぬ、立正安國論が佛教に依てあるだ
 けに彼れの信仰と衝突して居ます、其上に彼れの傍らには禪宗の道
 隆、眞言律宗の良觀、淨土宗の良忠等が居て、頻りに釋尊が幾十度
 も繰返して此經が如來出世の本懷であると仰せになつた、其法華經

に敵對して時頼の誠意を攪亂したから、時頼は何うしても日蓮聖人の諫めを容れませぬ

彼等の前には順逆の大道も大義名分もなかつた様子です、それで彼等は此聖人の諫めを容れなかつたのでありませう、然れども順逆の大道、大義名分、結局我國は是で國運の隆昌を圖つて來た國であるから、國を憂へ國を思ふの志士はハ、アさうですか、何うしても容れられませぬか、それなれば是で御免と立て退く譯には參りませぬ、殊に聖人の人と爲りが前の承久の大亂の項に述べた通りで、而も我が國體と因縁が淺くないのであるから尙ほ更らの事でありませぬ、そこで聖人は彼れが拒めば拒むほど勢づよく彼れを諫め彼れを諭さ

せ給ひました、是が即ち日蓮聖人の御難の原因、忽ちにして起り來つた伊豆國伊東への放鎗であります

是は三年にして赦免になつたのですが、是があつたからとて日蓮聖人は心に期させ給ひた

精神的北條一族征伐

の弓勢は決して弛めさせ給はぬ、管に弛めさせ給はぬのみか、一命は惜いけれども、一國の大事には換へられぬと云ふ、所謂憂國の衷情が全身に満て居る御方であるから、一難は一難よりも大なると同時に、精神の置處は愈々鞏固にして蒙古襲來を叫ばせ給へました、殊に文永五年に牒狀が到來してよりは、更に一層聲を大にして之

を叫び、遂に文永八年九月十日には執權職の問註所、今で云ふと裁
判所の公廷と云つたが様の所へ呼び出されて、此處に於て執權北條
時宗はじめ、内管領平左衛門頼綱、社寺奉行宿屋左衛門光則、其
外諸役人列座の前で

日本國を亡ぼす者は北條殿

であるときを叩いて大聲疾呼し給ひました、それは諄々と説く順
逆の大道、大義名分が爰に至つて尙ほ用ひられぬから、今は是迄で
あると云ふ御念から起つた捨てりふであります
流石に沈勇の北條時宗も此言を聞かれては黙し居られなかつた様
子で、是と同時に烈火の如くに瞋つて大喝一聲ぶち切れ是が日蓮聖

人の龍の口の御難の近因です、遠因と云つたら憂國の衷情が凝て精
神的北條一族征伐となつたのがそれでありませう

日蓮聖人の御頸が龍の口では切れなかつた、天下の白刃も日蓮聖
人の御頸には觸れさせる事が得られなかつた、御遺書を拜讀すれば
其御事蹟は只だ

左衛門尉兄弟四人馬の口にとりつきてこしごへたつの口にゆきぬ
、此にてぞ有らんずらんとおもうどころに、案にたがはず兵士ご
もうちまはりてさわぎしかば、左衛門尉申すやう只今なりとなく
、日蓮申すやう不かくのどのばらかなこれほどの悦びをばわらへ
かし、いかにやくそくをばたがへらるるぞと申せし時、えのしま

のかたより月のごとくひかりたる物まりのやうにて辰己のかたより戌亥のかたへひかりわたる、十二日の夜のあけぐれ人の面もみへざりしが、物のひかり月よのやうにて人々の面もみなみゆ、太刀取目くらみたふれ臥し兵共おぢ怖れけうさめて一町計りはせのき、或は馬よりおりてかしこまり或は馬上にてうづくまれるもあり、日蓮申すやういかにどのばらかゝる大に禍なる召人にはどをのくぞ近く打ちよれやとたかゝとよばわれどもいそぎよる人もなし、さてよあけばいかにいかに頸切べくわいそぎ切るべし、夜明なばみぐるしかりなんとす、めしかごもどかくのへんじもなし、はるか計りありて云くさがみのえちと申すところへ入らせ給

へと申す云々（種々御振舞御書の一節、書中に左衛門尉とあるは四條金吾頼基の事）

とだけで何の驚く程の事ではないやうに思はれます、然れども其月のごとくひかりたる物と云ふのが却々に恐ろしいものであつた様子で、是が爲に天下の白刃は刎ね飛ばされました

因みに述べて置きます、故重野博士が日蓮聖人の龍の口の御難は虚だど云ひ出してより、又た禪坊主が禪僧の命乞で助かつたなど云ひ出してより、此御難の事を兎や角と云ふ者や思ふ者やがありますが、是は日蓮聖人の性格を知らず、又た法華經を知らぬ者であります、其證據には、諸君に於て日蓮聖人の性格を移して自分の

性格とし、日蓮聖人が法華經を信じさせ給へた如くに法華經を信じて御覽、其中より靈感と云ふ不思議の威光が目に見へぬ所謂月のごとくいひかりたる物となつて靈山の方より諸君の御身に飛び來り、眞逆の時には鐵砲玉でも彈き返します、擔ぐと思し召すな、我輩等には數々それがあつて居ますぞ

命しらずの日蓮聖人の命

は斯の如くで天下の勢でも其命を奪ふ事は得られなかつたのです、是は法華經の靈が日蓮聖人の信仰の強盛なるを愛で、衛護したからの事です、耶蘇教は自殺を罪惡だとして居る、自殺は討死にも通する、近時歐亂で互に捕虜の多いのは一に只だ命が惜いのみではな

い、其傍らに此罪惡を造りたくないと言ふ宗教上の觀念が手傳て居るからの事です

法華經は是とは正反對で自殺せい討死せいと勸めて居ます、御文の中に身命を惜まずして無上道を惜めよとか、身を殺して法を弘めよとか有のがそれでありませぬ、そして又た此無上道と云ひ法と云ふのは、要するに正義公道の事であるのだと、斯う解されぬ事はありませぬ

又た之を諸君の今後に當箝たら敵に後を見せるなどか、眞逆の時には一命を捨て捕虜なんかなるなどか云ふとになります、斯う云ふと只だ死の一方の様であるが、元來生と云ふ者は死の中にある

もので、死を離れて外に生はありませぬ、されば死を恐れたら生を
求める事は得られぬ、そこで死です、死を決心して正義公道を辿る
と其中に生が湧て来ます、日蓮聖人の龍の口がそれで、前に讀み上
た種々御振舞御書の御文の中に

左衛門尉申すやう只今なりとなく(泣く)日蓮申すやうふかくのと
のばらかなこれほどの悦びをばわらへかし、いかにやくそくをば
たがへらるゝぞと申せし時云々

とあるのは、大信者の四條金吾と云ふ人が日蓮聖人が龍の口へ引れ
給ふ瘦馬の轡に取付て随従し、龍の口へ着して兵士共が斬罪の準備
に取掛つたのを見て、所詮今生の御暇乞であると思ふて泣き出した

のを、日蓮聖人は此斬罪こそ我が本望である、兼て期した所を只今
成就するのである、一期の悦び是に過ぎた事はないと彼れが泣くの
を叱り給ひた所であります

斯る決心の人に對して始めて法華經の衛護はあります、法華經は
全く天地間の

精靈の結晶經

であるから、名は諸天諸神とあつても實は正義公道を衛護せさせ
給ふ所の神靈の結晶體であります、故に深く之を信じ之を尊ぶは此
意味に於て正義公道を衛護し給ふ所の神靈を信じ尊ぶのであります
、然れども始めから此衛護を目的として信じ尊ぶのは、一面に於て

淫祠邪教的意を含んで居るから未だ深く信じ尊ぶのではありませぬ、結局法華經を信じ尊ぶのは純の一字が肝要です、純とは混合物なしと云ふ意であるから、護的觀念や欲的意志やは決して混同しませぬ、換言すれば我一命を法華經の供養に捧げ奉らんとの觀念を以て信じ尊ぶのだと斯うなります

斯うなつて始めて感應同交と云ふ事があります、偕て感應同交、是は天地間の精靈と我が信仰とが合致した所を云ふ事で、例を擧れば日蓮聖人の龍の口であります、始め松葉ヶ谷の焼打の御難も暴徒の氣配で豫知せられて助け給へた、伊豆國篠見ヶ浦の俎板岩の御難も彌三郎の義侠に助け給へた、小松原の御難も工藤吉隆が討死に助

り給へた、我々の上で云は、先づ満足だと云ふ所なれども、日蓮聖人は却て其助勢があつたのを不満足に思し召して、是より一番奮勵して人間業では助かる事の得られない破目に陥つて見たいと決心し、そこで龍の口を望ませ給へたのであります

龍の口は天下の刑場

であるから何んな者でも此處に引据られた人を助ける事は得られませぬ、そこで四條金吾、此人は江馬遠江守の家臣で當時に於ける鎌倉武士の精華であります、頼基陳狀と云ふ御遺文に
去る文永十一年二月十二日の鎌倉の合戦の時、折節伊豆國に候へしかば十日の申の時に承りて唯だ一人宮根山を一時に馳せ越へ

て御前に自害すべき八人の内に候へき云々(此合戦とは年鑑に「時宗兄を弑す」とある時の合戦で、所謂兄とは式部太輔時輔で彼れは京都六婆羅に在勤して居る中に、時頼の相續を弟の時宗がして鎌倉の執權となつたのを恨み、江馬遠江守等と結托して時宗を殺し、己れ鎌倉の執權たらんと謀りし其謀計が發覺して、それで京都と鎌倉とに一時に戦争が起つたのです)

とあるが如く却々に忠義あつき豪雄であります、而して其兄弟四人も有たのですが、何さま天下の刑場であるから手出しする事は得られません、そこで不覺にも聖人の先途を御見届け申上て後に切腹して冥途の御供すると申上たのであります、又た

此切腹して冥途の御供する

と申上た事は爰には見へませぬが、文永八年九月二十八日附の四條金吾殿御消息と云ふ御書に

さてもく去る十二日の難のとき、貴邊たつのくちまでつれさせ給ひ、しかのみならず腹を切らんと仰せられし事こそ不思議とも申ばかりなけれ(中略)かゝる日蓮にともなひて法華經の行者として腹を切らんと給事、かの弘演が腹をさいて主の懿公がきもを入たるよりも百千萬倍すぐれたる事也云々

とあるからそれで知れて居ませう
要するに日蓮聖人の法華經に對し給ふ信心は、火の如く熾んで又

た水の如く續いたのであるから、それで此人間業では助る事の得られぬ龍の口と云ふ天下の刑場で法華經の

則遣變化人爲之作衛護○諸天童子以爲給使不可毒不能害○刀尋斷々壞

等の文字が月のごとくひかり物となつてまりのやうにて辰己のかたより戌亥のかたへひかりわたる云々の種々御振舞御書の御文の如くになつたのでありませう

諸君かつぐと思し召すなよ、平たく云はゞ是は何も日蓮聖人に始まつた事ではありませぬ、結局我國は法華經と同じく天地間の精靈の結晶體たる國家であるから、此國の爲に正義公道を辿り、常に此

國家に一命を捧げて見たいと云ふ大決心があれば、それが法華經に冥合して日蓮聖人の龍の口の様な結果を來します、例は聖人の外に尙ほ幾干もありません

彼の蒙古襲來の時の不思議

であります、伏敵篇と云ふ内閣修史局で編纂せられた書中の文永

十一年の役の卷に斯う云ふ事があります、讀で見ませう

元軍已に對馬を奪ひ壹岐を破り肥前の松浦に暴掠を逞ふし、十月十九日進んで太宰府を攻撃せんと欲し其戰艦を筑前の沿海に聚む、我軍之を迎ひ同二十日筑前の今津、赤阪、博多、箱崎に接戦す、元軍は火玉を飛ばし毒矢を放ち、進退掛引自由自在にして戰場

の法すべて我國人の意外に出ければ、我軍始めの程は合戦利あらず、左れども諸手の勇將烈士は孰れも該分の働きをなし、敵將を斃し寇兵を殺し死力を盡して蹈留まりしが、少貳入道覺惠を始めとして手負死人數多く、特に不意の攻撃を受けしとなれば軍令の合期せざるものありて、口惜くも其軍を退き水城に據りて元軍を防ぐに至れり、元軍は勝に乗じて箱崎博多に放火し、海岸數里の家々を灰燼に付して思ふ儘に亂暴を極めけるが、此夜白衣を着たる勇士三十人ばかり不意に起り、矢先を揃えて敵陣に射出したるにぞ、元軍その異形の出立に怖れ、又た家々を焼く火焰の海面に映するを波の中より猛火燃出ると見なし、孰れも身毛堅ちて魂魄

身に添す大將劉復享創を病みて先づ船へ上りければ、是に續きて我もくと乗船し、中略、折しも海上より俄に大風雨吹起り、凶徒の船は風濤を避る術なく、權折れ船破れ漂没數を知らず云々と斯うであります、是で大体の上で此戦争の勝敗は分りませうが、其中の白衣を着た勇士三十人ばかり云々、波の中より猛火燃出ると見なし云々、俄に大風雨吹起り云々

如何に天祐を解せぬ者

でもよもや此事實を否認する事は得られまい、嘗にそれのみならず弘安四年の役です此時は蒙古は已に支那全土を征服し盡した時であつたから、我國へ襲ひ來つた勢力も文永の役に數倍して居まし

た、然るに又も最後の一夜に駘風が起つて敵船の大部分を波に捲き込んで了りました、天祐でせう全く天祐に相違ないのでせう、白衣の勇士、海中の猛火、文永弘安二役共に最後の一夜に大風が起つて賊船を波浪に捲き込んだ、何う考へても人爲とは思はれまい、已に人爲と思はれねば天祐と云ふの外はないのでせう

又天祐と云ふのは具さに諸天の祐けと云ふので、前に讀み上げた法華經の則遣變化人爲之作術護や、諸天童子以爲給使不加毒不能害や、刀尋斷々壞等の御文が此戰場へ臨んで寇兵を俛み飛ばした所であります

それも其筈、日蓮聖人は法華經の化身で、承久の亂の項に述べた通りで全く我國を助けん爲に出現せられた御方です、故に蒙古襲來に就ては未だ人々が夢にもそれと思はぬ文應元年、即ち彼れが牒狀を渡す九ヶ年も前からソレ他國侵逼があるぞ、ヤレ蒙古が襲ひ來るぞと、一面は幕府に警戒を薄り一面は國民に戒告する等、随分はげしく行て居られます

是が又た妖言を放つて天下を驚倒する者と云ふ罪名となつて、伊豆國伊東の流罪及び龍の口の御難等の原因ともなつて居ます、然れども日蓮聖人の天職は我國を泰山の安きに置んと云ふのであるから、是が爲に一命を殞したら國家の爲に殞れたので

殞した一命の價値は高い

どの決心で難に遭ひ給へば、それだけに又た大聲を發して叫ばせ給ひました、御遺文を拜見すれば殆んど其事の數に限りがない程であるので知れて居ます

其叫び様も始めより弘安四年の春頃までは蒙古を大敵視して、非常に恐ろしく感じさせる様の叫び方であり、成程彼れは大敵であります、一言に形容すれば歐亞の半面以上を手中に収めた其餘威を振ふて我國へ臨むのであるから、云ば彼は磐石我は卵である、卵と磐石と衝突するのだから勝敗は已に知れて居ます

然れども本人たる聖人の御胸中には此二つが逆であります、彼れは卵、我は磐石と斯うなつて居ますから、弘安四年五月十五日には

護國の本尊を圖して諸天諸神に大乘一實の法味を供養し、是で先づ安心と胸なで下して其翌六月十六日には、小蒙古御書と云ふ一書を發して檀信徒を訓戒し給ひました、所謂小蒙古とは、一は是迄に大元蒙古と叫んで居させ給ひたので是に對しての小蒙古、一は勝敗の數に於ての小蒙古であります、但し小蒙古御書は故らに爰に掲げて證據とする必要がないから略すけれども、護國の本尊は大切であるから床の上に懸けて祠つてあります

其中に蒙古は再び襲來しました、時は弘安五年七月、伏敵篇に就て見るに

蒙古の軍勢は

宗兵十萬を以て范文虎に付し之を江南軍とす、忻都洪茶丘に命じ
 道を高麗に取り陸行す之を東路軍とす、三月忻都洪茶丘先發高麗
 に到り遂に合浦に赴く、五月廿一日忻都洪茶丘等蒙麗漢の軍四萬
 人戰艦九百艘を以て壹岐を犯し、島民を殺すと三百餘口慘狀最も
 甚だし、我兵壹岐瀬戸浦に防戦して利あらず(中略)六月五日筑前
 志賀島に戦ひ之を破る、六日復た戦ひ大に之を破る、賊退ひて宗
 像の海に至る(中略)范文虎また戰艦三千五百艘蠻兵十餘萬を以て
 到る、筑前の海上舳艫相銜む合戦數回我兵勇闘屢々之を破る、賊
 移つて鷹島に據る中略八月朔日颶風大に起つて賊船覆沒溺死算な
 く漂流死を免がる、者尙ほ數千人、小貳景資等之を掩撃す七日に

至りて戰始めて止む、賊の降を乞ふ者千餘人悉く那珂川に斬
 と斯うあります、是で見ると又も颶風の爲に勝利を得たのでありま
 せう、文永の役も颶風の勝利、弘安の役も颶風の勝利、云はずとも
 此間に何者か、介在して居るやうに思はれませう、所謂何者かは日
 蓮聖人を研究して御覽なさい

因みに一言します、龜山天皇が身を以て國難に代らんことを伊勢太
 廟に誓願し、且つ石清水八幡宮に詣で、精禱一夜之を祈らせ給ひ
 たと云ふのが此時です、如何に國中が震駭したかは推して究めた
 ら明瞭します

蒙古襲來も是で終りましたが、一時は却々の騒動で、モウコライ

と云ふと泣く兒も泣を止めたと云ふ事が古書に在ります、兎に角
に一天の大君が千金の御身を以て國難に代らんと祈らせ給ひた程の
大難であつたから、モウコライの語は恐るべきの表辭にあつて居た
かも知れませぬ、併しそれは兎に角に

此大國難たる元寇反撃は

文永弘安の二役共に颶風の爲に掃攘し盡しました、是で我國は神
靈のある國だと云ふ事が彼等の頭腦へ印したと思はれて、忽必烈は
尙も再舉を企て、居ましたけれども、幕下に異論があつて遂に事な
く終りました、伏敵篇中弘安五年の巻に
七月高麗王春使を元に遣り戦艦百五十艘を造り日本を撃つを助

けんを請ふ、九月元諸州に命じ戦艦三千艘を造る、十一月元主は
天下に令して謀叛大逆を除くの外凡て死罪を犯す者は軍に充てし
む

とあり、又た同じく六年の巻に

正月元また兵を發せんとし高麗をして糧二十萬石を備へ諸軍に命
じ戦艦を造り舟楫を習はしむ

とあれば、若し幕下に異論者なかりせば遅くとも其七年位には第三
回目の元寇があつたのでありませう

然れども此事は終になかつた、是は歐亞の半面以上を征服した程
の忽必烈も、天には到底勝つとは得られぬと悟つたからでありませ

う、成ほど天には勝てませぬ、我國は天であります、其天の使ひは日蓮聖人であります、日蓮聖人が法華經を提げて天下に呼號し給へし所は其儘に天であります、故に人の頸を切る事は大根の葉を落すが如くにも思つて居なかつた北條時頼、全時宗は共に其面前で汝が先祖は天下の謀叛人だと云はれたり、又た汝は我が日本國を亡ぼす者だと云はれたりしても、遂に聖人の御頸は刎なかつた、イヤ刎なかつたのではない龍の口で已に刎やうとしたが、天の使ひは天の加護がある、そこで前述のやうな事で中止しました

それ程の日蓮聖人だ

から弘安の役が起りかけて來ると同時に稍や御苦心がありました

が、是が終ると全時に胸なで降して、是で日蓮が出現の要は終つたと云ひ給へたかのやうに、終に其翌弘安五年十月十三日には入滅し給ひました、入滅とは釋尊で云ふと涅槃の事です、我々で云ふと死亡の事です、兎に角に靈魂を冥界に遷した事です

嗚呼日蓮聖人は入滅し給へた、然れども其御靈は天であるが故に長へに死の中へは入らせ給はぬ、法華經には

方便に涅槃を現す、而も實には滅度せず乃至常に靈鷲山及び餘の諸の住處に在りとの御文があります、又た日蓮聖人の御遺文中而も弘安五年十月七日附の御遺文の中の終りに

時に六十一と申す弘安五年壬午九月八日身延山を立て武藏國千

東郷池上へ着きぬ、釋迦佛は天竺の靈山に居して八ヶ年法華經を
 說せ給ふ、御入滅は靈山より良に當れる東天竺俱尸那城跋提河の
 純陀が家に居して入滅なりしかども、八ヶ年法華經を說せ給ふ山
 なればとて御墓をば靈山に建てさせ給ひき、されば日蓮も是の如
 く身延山より良に當りて武藏國池上右衛門太夫宗長が家にして可
 死候歟、縦ひいづくにて死に候とも九年の間心安く法華經を讀
 誦し奉り候山なれば墓をば身延山に立させ給へ、未來際までも心
 は身延山に住む可く候、日蓮は日本六十六ヶ國島二つの中に五尺
 に足らざる身を一つ置く處なく候へしが、波木井殿の御育みにて
 九ヶ年の間身延山にして、心安く法華經を讀誦し奉り候へつる志

をば、いつの世にか忘れ候べき、しらすや此人は無邊行菩薩の再
 誕にてや御座すらむ、日蓮は日本第一の法華經の行者也、日蓮が
 弟子檀那等の中に日蓮より後に來り給ひ候は、梵天帝釋四大天
 王閻魔法皇の御前にても、日本第一の法華經の行者日蓮房が弟子
 檀那なりと名乗て通り給ふべし、此法華經は三途ヶ河にては船と
 なり死出の山にては大白牛車となり、冥途にては燈となり靈山へ
 參る橋也、靈山へましく、て良の廊にて尋ねさせ給へ必らず待
 ち奉るべく候、但し各々の信心に依るべく候、乃至、返しくも
 能々信心候て事ゆへなく靈山へましく、て日蓮を尋ねさせ給へ、
 其時委しく可申候、南無妙法蓮華經

どの御文があります、御文中の靈山が即ち日蓮聖人が長へに我が大日本帝國を守護せんとて、安らげく住し給ふ所でありませう、所謂其御住所は、釋尊は天竺の靈鷲山、日蓮聖人は娑婆即寂光の本國土妙たる我が日本の最清淨地の事で、信仰讚歎を縁とすれば諸君或は我等が住する此住所が即ち其處なのであります

斯く述べた所で諸君に信がなければ何の事かと疑はれませう、そこで例として述べるのは彼の楠公七生の金言、手近く廣瀬中佐が旅順口閉塞に赴かんとて母艦の

艦長に遺された

彼の有名な七生の遺言です、實は遺言ではなかつたのですが、不

幸遂に遺言になつたのであります

それは、去る九月前海軍大臣八代六郎將軍を其寓居に訪ねしに、來客があるから暫く待て居て呉れとて導かれたのが將軍の書齋でした、通つて不圖仰ぎ見れば桁の額です、半切に書た廣瀬中佐の

指揮ニ福井丸ニ再赴ニ旅順口閉塞

七生報國 一死心堅 再期成功 含笑上船

武夫

自書の文で花押もなければ印形もないものです、然れども中佐の決心は此文にて已に世に溢れて居るから將軍は大切に保存して、而も額となして掲げて居たまふのです、されば之を前に讀みあげた

法華經の御文、又た日蓮聖人の御遺文の御文に引き當て、更に楠公七生の金言と對比し且つ研究して御覽んなさい、詮する所は全く日蓮聖人の現生と同じ靈魂が冥界に安住し給ふと同様に、楠公も廣瀬中佐も、共に其靈魂は現生と同じ靈魂となつて、冥界に安住して我國を守護し給ふと斯うなります、其外に斯んな例を擧げたならば、元龜天正年代の加藤清正、藤堂高虎はじめ多くの諸將、明治大正年代の大迫陸軍大將、伊東元帥、東郷元帥、上村海軍大將、八代海軍中將等其外の諸將軍で、共に日蓮聖人を眞向に振り翳して戰場へ臨ませ給へた點に於て、同じく冥界に在る中に各々交渉があつたかの様に思はれて其例となります、所謂七生の金言で、七たび生代り死

代りして我國を守護すと云ふのが實現したのかも知れませぬ
 諸君は兵卒だからとて決して自分の生命を輕んじ給ふなよ、兵卒でも將校でも生命に輕重はありませぬ、そののみか何うかすると將校よりも兵卒の生命の重い事がある、左れば諸君も此七生の金言を常に服膺し、眞逆の時には其根本たる法華經を胸に持ち、日蓮聖人を頭に頂きさいしなされば、諸君は其儘に加藤清正、又た楠公や廣瀬中佐やが諸君と再生したのになります

草履つかみが關白職

になつた元龜天正の代なりせば諸君は或は肥後の大守となられ、伊勢の國主ともなられやうが、現代は戦争も學術技藝の中、戦ひは

機械きがいでする世よの中なかだから左右さうぶはなられませぬ、然しかれども一死いちじを以もつて國くにに報むくへた至誠しせいは直たに神靈しんれいと仰あをがれて、恐おそれ多おほくも、今上きんじやう天皇陛下てんのうへいかを始め奉たてまつり各皇族かくこうそく方が、御身おんみを清きよめて其靈前そのれいぜんに御手おてを合あせ給たまひます、此点このてんに於おいて肥後守ひごのかみとなつて終をはるのがよいか、又また一平いへい民みんとして長さとしへに、天皇陛下てんのうへいかの御記臆ごきおくを往復わうふくするのがよいか、世よには瓦かわらとなつて全まふするよりも玉たまとなつて碎くだけよと云いふ譬言たとへがあるが、是これは肥後守ひごのかみとはならぬ代よに徒いたづらに空想くうさうを守まもつて長ながらへるよりも、花々はなはなしく討うち死じして芳名はうめいを千載せんざいに輝かがかせよと云いふ事ことであります、斯かう云いふと諸君しよくんの中うちには或あるひは我々われわれ兵卒へいそつの身みを以もつて討死うちじした所ところで、逆さかも其名そのなが歴史れきしに遺のこる様やうな事ことはない、左されば夫それよりも身みを大事だいじにし

て凱旋がいせんするのがよいなど思おもふ方かたもあります歟か、或あるひはです、命いのちは惜おしいものですから之これを標準へうじゆんとしての推測すゐそくです、推測すゐそくだから當あたりもしまいが若もしとして偕さて兵卒へいそつ、成なるほど兵卒へいそつとしての當面たうめんより按あんすれば、先まづ歴史れきしには遺のこらぬ方はうが當然たうぜんですが、一方いっほうより按あんすれば遺のこらぬ事ことはない、只ただ諸君しよくんの活動かつどうぶり一つです、諸君しよくんに將校せうかう以上の活動かつどうがありさ
いすれば兵卒へいそつでも屹廣きつくわう歴史れきしに名なが遺のこります
縦たひ歴史れきしに名なが遺のこらぬにした所ところで、兵卒へいそつでも已すでに軍人ぐんじんとなつて戦せん場じやうへ臨のぞんだ限かぎりは、生死せいじともに國簿こくぼに載のるのだから、醜美しうび共ともに名なは遺のこります、若もし捕虜ほりよとなつて平和克復へいわこくふくの時ときに還かへつたならば、醜名しうめいは長さとしへに消きへぬと同じく、討死うちじして骨ほねを馬革ばかくに包つんだら、芳名はうめいが末まつ

代に輝くは天の配劑で又た我國の國風であります、それだから國風
としては戦争に行く時には悉く討死を覺悟して、水さかづきして發
途するのではありませぬか

嗚呼討死なる哉

已に發途の時に討死の覺悟を決して行く、何とて卑怯の振舞がな
りませう、其結果は多くは猪武者的で、向ふ所は金城であらうが鐵
壁であらうが、一旦向つた限りは碎かすには置ぬのでありませう、
随つて討死の數も多い筈ですが、國民は之を山櫻の花に譬へて居ま
す、近代の歌聖香川景樹翁の歌に
敷島のやまと魂を人とは、

あさひに匂ふ山櫻花

と云ふのがあるが、是が即ち其であります、意は行人の足を止める
位に立派に咲たけれども、開落共に三日見ぬ間の櫻かなで、やんや
と嘯し立られる中に散つて了うと云ふのに在つて、宛然軍人が
戰場へ臨んだ様であると云ふ事を諷した歌であります
軍人に此覺悟と決心とが堅くて戰場で活動の上に現はれたら、天
は之を祐けて死地に生を與へます、所謂天は法華經であるから、國
家の爲に秩序たゞしく死地に陥らば、法華經は此人に生を與へて祐
けます、之を天祐と云ひます、左れば諸君、所謂此覺悟と決心とを
以て死地に陥り給へ、治が極れば亂が起る、必竟戦争は明日にも起

るものと覺悟して、是と同時に討死を決心し給へ

念の爲として爰に一言します、卑怯の振舞には天の祐けはありませぬ、所謂卑怯の振舞とは、天の祐けを目的として立働く等は皆な之を云ふのです、左れば断じて天の祐けは心中に置ぬ事、恰も廿七八年戦役の時に、我艦隊は黄海の戦ひが始まるや、敵に白旗と思はれてはならぬとて、禪までも海に投げ捨て了つたと云ふ事があるが全くそれです、所謂これ要慎です、我國の軍人は餘りに大膽だから戦争中に禪を洗濯して干して置く、是が敵の眼に白旗と見へて降参したと思はれるなんどの事のない、全くの要慎であります、要慎は前から、白旗らしい禪は前から外れます

何にもせよ軍人は國家の干城

だから精銳の二字に注意を拂ふのです、諸君は幸にも其精銳の中に入たのだから體格にも申分はないのですが、それでも諸君が常に恐れねばならぬものが一つあります、幾ら精銳でも又た豪傑でも英雄でも此一つには何うしても勝つ事は得られぬ、所謂一つとは是れ病魔です

病魔と云ふ奴は寝た間も要慎して居なければ、何日の間にか知らぬ中に襲撃して來ます、こんな事は諸君に云ふも必竟するに管たるに過ぎないのですが、それでも諸君はお若いから血氣の勇と云ふ奴が諸君の御身を驅つて惡所に導きます、さうすると諸君は次に面白

いと云ふ念に釣られて何事も忘れて了う、その忘れた結果は縦ひ營所の門の閉られる時刻迄は忘れぬのにしても、其外の事は何事も忘れて飲むワ食ふワ、ナニニ是位の事はと思ふ心が更に御身を驅つて暴飲暴食の淵へ投げ込みます

併しながら暴飲暴食も時には好からう、我々が兒童の時には食競べと云ふ事が行はれて居て、理由は戦場へ臨んだら二日や三日やは食はずに居ても、戦闘は食ふた者も同様に出来る様に胃袋を膨らかして置くと云ふのであつて、同じく武道の一端となつて居たからの事です、去ながら是れ所謂舊式で衛生も何もあつたものではありませぬ

然れども我等は醫者でないから細かい衛生法は知りませぬ、随つて衛生くは喧しくは噪ぎ立ませぬが、それでも年齢が年齢だけに衛生には注意して居ます、だから衛生と云ふに就ては

谷川の水に打るゝ岩ではないが

いつほれるともなし深くなる

と云ふ情歌の意を衛生の上より解して

血氣に驅られて暴食するな

胃の腑は寝た間も休みはせぬ

と口で唄ふのではない常に心で唄つて居ます、その心で唄つて居る所が眞實の衛生であります

終りに一言諸君に誠告

するのは女です、入營中は何うかすると藝娼妓酌婦等と關係が濃
 くなるものださうです、それは偶々の休日一杯のみ出したのが
 始り、終にその關係が濃かくなるとか、今は絶対に之を止めはし
 ませぬが、相成る事なれば諸君の方で絶対に止つて下さい、總ての
 罪惡の裏面には必らず女が居ます、諸君にそんな心配はないけれど
 も色は思按の外、よいか、我がるを社は明治大正に亘つて三十年
 も繼續して居る日蓮聖人の摸型の集会所であるから、此立場よりし
 て諸君を誠めます、終りに唱へる諸君萬歲

人は武士終

大正四年十一月五日印刷
 大正四年十一月九日發行

正價金拾貳錢

發行所 大阪市北區伊勢町十九番地 ぼぞむ社

發行人 大阪市北區伊勢町十九番地 渡邊隆

印刷人 大阪市東區館屋町二丁目五十一番地 本田恒市

取次所 大阪市東區瓦町四丁目 盛文館

電話 振替大阪二五七八六番 本局一〇四二番

不許複製

主幹 鐵腸居士

● 日蓮主義 何ぞ

ぞ 玉

毎月一回發行 定價一部五錢

三十餘年間日蓮聖人を研究して有名なる鐵腸居士を主幹として發行せし専門の雑誌也、故に文章は居士の獨特たる言文一致体、其外寄書には博士あり學士あり大僧正あり大學教授ありにて、錦上に更に花を飾り

居士は平素公言して曰く、日蓮聖人は開目抄に、日蓮と申す者は去る文永八年九月十二日龍の口にて頸はねられて候、是は魂魄此佐渡ヶ島へ來りて開目抄と申す文二卷造りて候云々、鐵腸と申す者は已に俗界に頸はねられて候、是は魂魄が此法界に迷ひ來りて喃喃と世を罵り居り申候云々と、以て居士の筆鋒を味ふべし

大阪北區伊勢町十九番地

發行所

何ぞ 玉 社

振替大阪二二九九八番

刷縮 最近訂正發行

日蓮聖人御遺文 全

本の形は天地五寸、横四寸、總紙數は二千三百七十餘、皮表裝背金字入天地金、正價金貳圓、送料金拾貳錢也

右は日蓮聖人一代の御書は悉く綱羅せしもの、殊に近來御眞蹟に對照し誤字脱字等は總て嚴確に訂正し、その上に從來の御書印本中になき御書をも數十通御眞蹟に照合して添付しあり、日蓮聖人研究には全く基礎たる書冊なれば我社は今回發行元に協し此書購求のみに限り金拾錢づゝ割引する事の承諾を得たれば、其ために代用する譯合なれば之を添付して發行元へ御申込まるべし、其發行元は

東京芝區二本榎町

日宗新報支社

振替東京貳貳六八番

- 上村海軍大將題字
- 高島大學教授序文
- 八代海軍中將題字
- 天羽軍醫中監跋文
- 佐藤海軍少將序文
- 鐵腸ひさを主幹著

● 研究資料 ● 日蓮聖人 全

右は日蓮聖人の御遺文又は其大意等を當籍て、一讀其儘に聖人の驚天動地の大活動を實見せしむるの意考より著はせしものにて、日蓮聖人を研究するには日蓮聖人御遺文に續く良書也、但し彼は原書、是は註釋書と見て可なり

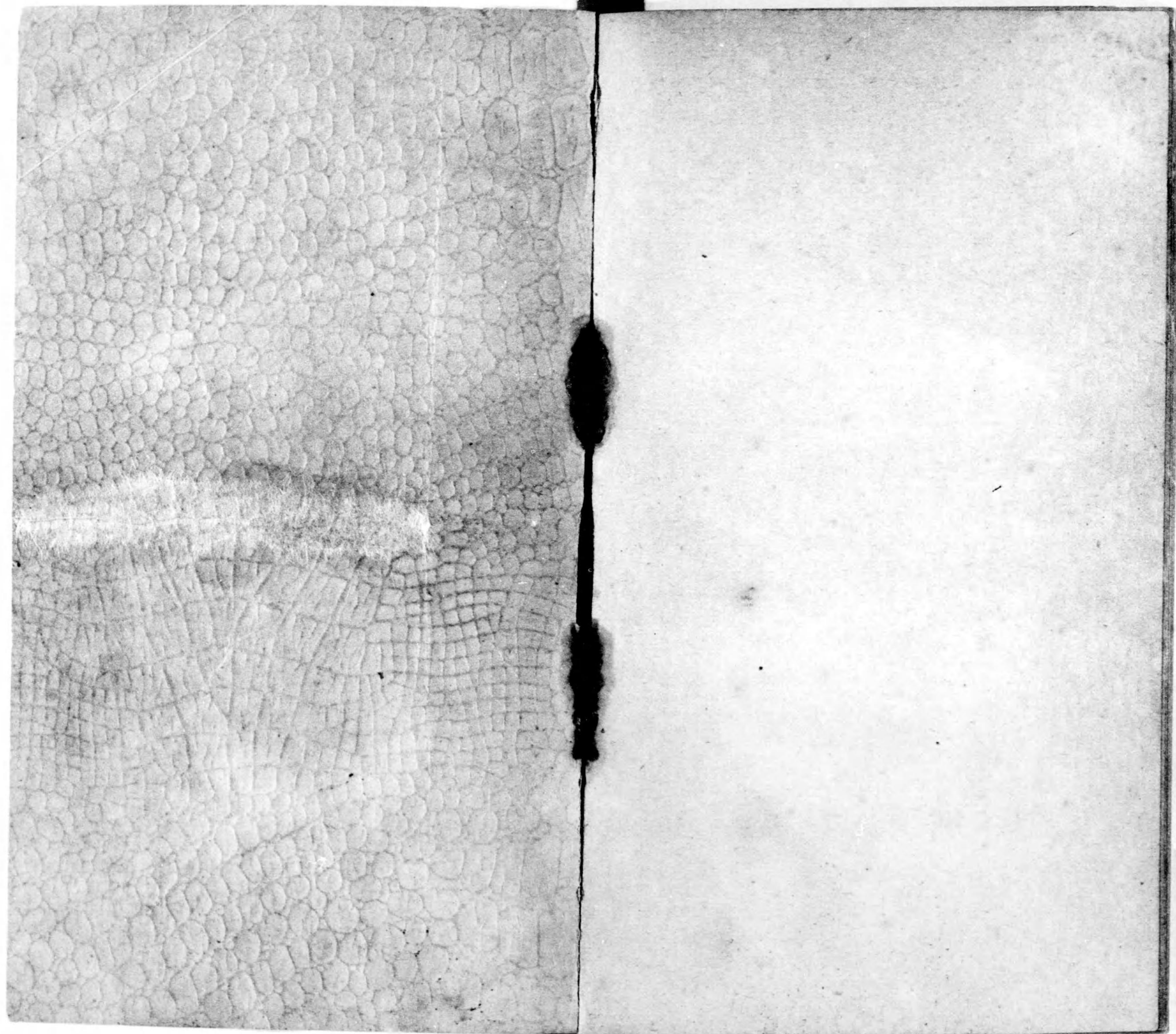
此書も本書の卷末に付しある割引券を添て御申込みあれば金八錢づゝ割引す

大阪北區伊勢町十九番地
 振替大阪二一九八番
 何ぞを社

日蓮聖人御遺文を求められる人は此券を切り
日蓮聖人御遺文割引券
 取り書面に添て申込まれるれば金拾錢割引あり

研究資料日蓮聖人を求められる人は此券を切り
研究資料日蓮聖人割引券
 り取り書面に添て申込るれば金八錢割引あり

此冊子は御大典記念の發行なれば讀む人は
奉祝の二字を飽迄も發展せしむるの心を起
されんとを特に爰に記して注意に供へます



終